

秋の教養講座 2020 (11/23) 講演「カミュ『ペスト』を読む」報告

◆◆◆秋の教養講座 2020 が、昨年 11 月 23 日 (月・祝)、放送大学奈良学習センターとの共催により、奈良県文化会館小ホールにて開催されました。講師は三野博司会長。三野会長が放送大学奈良学習センター所長を退任された記念として、放送大学の『スペシャル講演』として実施されたものです。コロナが広がって以来、カミュの『ペスト』が世界中で読まれ、日本でも『ペスト』についての三野会長の談話が新聞等でも大きく取り上げられました。今回は、その関心の高さを反映してか、放送大学の受講者と合わせ、過去最高の 65 名が聴講しました。

講演は、カミュの生涯を踏まえたうえで、『ペスト』が書かれた当時フランスの状況、『ペスト』には、市民対ペストの集団劇と、個人



の物語が交錯していることを指摘した後、『ペスト』第 1 部から第 5 部まで、季節とともにペストが推移していく流れを分かりやすく解説いただきました。とくに主要人物の会話を対話劇として再構成し、2 名の役者の朗読により再現する演出が精彩を放っていたことです。この作品を読んだときは、議論が多く、抽象的で難解な印象がありましたが、生身の人間の声を聴くことで、対話の意味するところがくっきりと浮かび上がるように感じられました。印象に残ったのは、幸福や自由を奪われ、絶えず敗北を強いられる終わりのない災禍に対して戦う主人公の医師リュウの姿で、神にも超越的な価値にも依存せず、ひたすら人間の次元で戦おうとする現実主義的な生き方に改めて感銘を受けました。

出版当時は第二次世界大戦の戦禍の記憶が生々しいときで、ペストをナチス、ペストと戦う人々をレジスタンスになぞらえて読まれたが、今日では、それだけでなく、また単なる疫病に対する戦いの物語でもなく、人間を襲う広い意味での不条理な暴力に対して戦う物語として読まれるべきだとの結論でした。

紙面では十分魅力をお伝えできませんので、放送大学 BS231 チャンネルで放送される番組をぜひご覧ください。詳しい時間が決まれば、また皆さまにお知らせします。(杉谷健治)

◆◆◆カミュの小説では、アルジェリアの町を襲ったペストの発生から終息までが、医師のリュウの眼を通して語られます。興味深い点は、主要人物が男性 (保健隊を結成するタルー、新聞記者ランベール、市役所職員グラン、パヌルー神父、オトン判事) に限られ、それぞれが行政・司法・医学・宗教・メディアを代表していること、さらにペストとの闘いの中で、彼らに当事者意識が芽生えることです。唯一、女性として登場するのがリュウの年離れた母親で、ペストを全く恐れずに、罹患したタルーを献身的に看病する彼女の姿が際立っています。彼女に一種の神々しさが感じられるのは、三野先生によれば、カミュの母親が投影されているためとのこと。ケアの仕事は女の役割とされてきましたが、カミュの作品では、女性の「献身」よりもむしろ、男性を凌駕する「冷静沈着さ」や「強さ」が描かれているような印象を持ちました。三野先生のお陰で、カミュの作品について様々な思いを馳せる有意義なひと時を過ごすことができました。(村田京子)

講演会を迎えるまで

三野 博司

今年の「教養講座」を私が担当すると決まったのは、3月の理事会でした。5月になって、放送大学本部から「スペシャル講演」の依頼が来ました。学習センター所長退職後の仕事であり、義務ではないのですが、引き受けることにして、「教養講座」といっしょの形でやりたいと答えました。メールでの打ち合わせのなかで、先方からは、「原文の引用部分については、朗読をしてもらう方をお願いする必要はないでしょうか？」との問いかけがありました。朗読は事前録音、あるいは会場での朗読も可能とのことでした。ひとつの考えがわいて、こうたずね返しました。「『ペスト』は男性の対話が多いです。彼らが、ペストと闘いつつ、その闘いの意味や、生きる意味について対話しながら、友情を深めていきます。男性二人を会場に招いて、この対話をしてもらうことも可能ですか？」こうして、対話劇をやることになったのですが、作品の理解を深める助けになったとしたら幸いです。



『ペスト』の講演会に参加して

竹本寿史 (たけもと としふみ)

講演会后、放送大学番組のインタビューで、『ペスト』を読みたいと思いますか?との、さもありません質問に、素直でない私は、「いや、読もうとは思わない」と答えた。しかし、この正月、初詣も避けて家に籠って読んでみた。この小説には多くの人物が登場するが、印象に残った人物を4人に絞り、彼らを寸評することを試みた。

- 1) 医師リュウ：封鎖されたオランの街から恋人の待つパリに帰りたいと懇願する新聞記者ランベールに対し、彼は、医師としての「理念」から、ペストに感染していない証明書を書くことを拒絶する。しかし、彼は、官僚的な「理念」に生きる人間ではない。むしろ、事態を「明るく(明晰に)見極める」ことで、あたかもコロナ禍の中、献身的に医療に従事する多くの医師と同じく、医師としての自分の務めに励む一市民として描かれている。
- 2) 小役人グラン：小説を書くことに熱中しているが、冒頭の一文のみ書き直しつづけている、冴えない男。しかし、彼は、ささやかな仕事で役に立ちたいということだけで、保険隊の事務の要の役割を果たしていく。そういう彼であるが、クリスマスの日、路上で倒れ、病床で死を覚悟し、リュウに、あの小説の原稿を「焼き捨ててくれ」と頼む。しかし、翌朝、奇跡的に回復し、原稿を焼いてしまったことを後悔する。彼は、滑稽かつ凡庸きわまる老人として登場するが、小説『ペスト』の「語り手」は、「静かな美德の本当の代表者」だったと評価している。
- 3) 裕福な青年タルー：彼は、手帳に詳細な観察日誌を綴っていて、保険隊を結成する。「一体何が君をそうさせるのです?」と医師リュウに聞かれ、彼は、「わかりません。僕の倫理かも知れない」と答える。「どんな倫理です?」との問いに、「理解することです」と返答する。二人の行動様式は似通っているが、小説の後半で、彼の行動の原点が明らかにされる。彼の父親は検事であり、若い頃に、父親が死刑判決を言い渡す法廷に立会い、衝撃を受け、死刑反対の持ち主になる。彼にとっては、ペストも死刑判決と同じものなのである。しかし、ペストは、そういう彼にまで襲い掛かる。看病するリュウに、彼は、苦痛の攻撃に動揺も見せず、「勝負は負けそうな勢いだ」とユーモアに語るが、付き添うリュウのお母さんに「今こそすべてはよい」と呟いて死んでいく。
- 4) 新聞記者ランベール：オラン市の衛生状態を取材に来た彼は、オラン市が封鎖され、自由を奪われたことの憤りを、医師リュウにぶつけ、実際に脱出を何度も試みる。しかし、脱出を目前にして、リュウやタルーに会って、「自分一人だけが幸福になるのは、恥ずべきことかもしれない」、「こうして見た通りのことを見てしまった今、僕はもうこの町の人間だと分かりました。この事件は、我々みんなに関係のあること」と語り、保険隊に参加する。

彼ら4人はいずれも、生き方はそれぞれ違うが、ペストという災難にあつて、自分にできることをするという、地に足の着いた真つ当な行動をした人達である。彼らの交わす会話の中には、心に響く名言が多くある。

今思えば、講演会に行く前に、『ペスト』を読んでいくべきだったと後悔している。講演を聴けば、判るだろうという安易な気持ちで参加した。その横着さとは反対に、講演は、放送大学の講義を兼ねた、読んで行くのを前提とするような、厳粛なものであったので、さっぱりついて行けなかった。小説『ペスト』には、寸評した彼ら以外にも多くの人物が登場し、それぞれの人間模様が克明に描かれている。また、哲学的な命題も扱っている。この一級の文学作品は、講演者のお話やレジュメがなかったら、十分には読みこなせなかっただろうと思う。

小説『ペスト』の最後で、この物語の「語り手」が医師リュウであることが明らかにされるが、彼は、これを語ることを決心した理由に言及する。それは、「沈黙する者たちの仲間にならないために、ペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、せめて彼らになされた不正と暴力の思い出だけでも残すために、そして、ただ単に、災厄のさなかで学んだこと、すなわち、人間のなかには軽蔑すべきものより賞賛すべきものの方が多い、と語るため」だったと。

コロナ禍の真つ只中にいる我々は今、如何にコロナと闘うか汲々としているが、これが終焉を迎えると、すぐに全てを忘れてしまうだろうと思う。だからこそ、忘却しない為に、このコロナ禍での日常を記録することが必要だと思う。タルーが手帳に記録したように。なぜなら、疫病は、天災と同じく、時をして襲ってくるものだから。そして、それに備えるために。

読書案内：アルベール・カミュ (1913 - 1960) の小説 (編集部)

1942年『異邦人 *L'Étranger*』1957年『追放と王国 *L'Exil*』(短編集)1947年『ペスト *La Peste*』1971年『幸福な死 *La Mort heureuse*』(死後刊行)1956年『転落 *La Chute*』1994年『最初の人間 *Le Premier Homme*』(未完の遺作)